

- (5) 本誌 23 巻 2 号「サロン談義 7」コメント 1 に関連して、アユの系統分類について考えさせられました。和歌山県の「天然アユ」を年に数度、舌鼓している小生にとって、コメント 1 は、亜種か別種か？などの基本的な問題などについて、生物分類学にも物申しておられるのに興味を惹かれました。我が国でのアユの研究の歴史は古く、様々な専門的知見の蓄積に加え、一般書も多々出版されており、食材だけでなくリクレーションとしても誰もよく知っている動物なのに、今回指摘されたような諸問題があることが、十分に理解されました。皆様、アユはお好きでしょうか？ サケ類では陸封型と海陸両側型の形態差のすこぶる大きいことは周知ですが、アユ類でも同様の現象があり、分類学の十分進展した時代なのに、「湖アユ」と「海産アユ」を 100%判別できる遺伝子マーカーが開発されていない」との言には驚きました。探求すべきことがまだ残されているのは、終わりの無い系統分類学の性格上の必然でしょうが、どれくらい遺伝子の攪乱が各地で起きているのか突き止められ、元来の自然状態にもどせたら、アユも庶民の味にもどるでしょう。しかも河川も美しい昔の姿にもどり、森と海と里のよい関係がきづかれるでしょう。人の限らない欲望のすこさが「今や昔」物語とならんことを、アユを食みながら、天然アユ釣り名人？に深謝しつつ…。

2010/7/5 (久保田信、京都大学フィールド科学教育研究センター
海域ステーション瀬戸臨海実験所 准教授)